

西原の方言

③

—我謝編—

前回の棚原の方言に匹敵するぐらい特徴があるといわれる我謝の方言について、城間清一さんとその奥さんの千代さんにお話しをうかがいました。

—ここ（我謝）は方言でなんといえますか。

清一さん：ガージャ。ガージャ・ユナグシクともいいですよ、隣はユナグシク（与那城）ですから。

—我謝の方言はどうです、他と変わりますか？

清一さん：変わるはずよーとばが。しかし前よりはなくなっていますよ。あのですねー、嫁さんがみんな別からきていますからねー、イクサ（戦争）あとから。もう前のなまりはなくなつて、別の部落の人が聞いてもなくなつてるといいますよ。

千代さん：ワーガチチーネー

（私が聞いたら）ジコーウトウラサータイ（怖かったり）、ウトウラサンシガヒイルマサヌヨー（怖いというか珍しいよ）。あのオバサントー（おばさん達）、すぐウージカシーシーネー（キビ作業の手伝いしたら）

—（キビ作業の手伝いしたら）ヒヤーヒヤーして、ヌーイツチヨーガヤーシー（何いつてるのかなーって）。

ちなみに奥さんは幸地の出身だそうです。ガー ज्याムニーは日常の会話のなかで、感嘆詞「ファイ」、「ウファ」や接続詞「ヒヤー」などが頻繁に使われたといえます。

また、終戦後我謝を一躍有名にしたことばとして「ニシバラガージャ、アングギージョーグ、ウルニーナマニーンソティン、チャーマギーカラ（西原我謝の人たちはてんぶらが好きだ。生揚げであつてもいつでも大きいのを好む）

というのがあつて、ガー ज्याムニーをまねて話すとよりおもしろかつたといえます（『西原町史』民俗編にも記述あり）。

—清一さんのお仕事は？

清一さん：農業。だけど戦前は馬車を引いて、その仕事やつていたんですよ。ずっと前は、那覇から与那原まで汽車があつたでしょう軽便、軽便があつて、西原工場（製糖工場）の砂糖を駅まで運搬していた。こつち（西原）は汽車こないでしょう、汽車があるところまでキドウグワー（軌道）で運びよつたですよ。

—泡瀬まで馬車軌道がありましたよね。

清一さん：わかります？

あんたいくつねー。自分達がやつてからはもう、泡瀬まではいかなかつた。当間（中城村）まで。

ワッター馬車ムッチアツチー、アマカイ保榮茂リシ（自分達は馬車持つていて豊見城村の保榮茂にいつたけど）、保榮栄シルーシ（保榮茂の人は色白で）、ウマ、フトウンド ムルイーカーギー（大半がきれいな顔だちだった）。

千代さん：ユーアンシ マーカイ イチャタルヤー（よくあつちこつち行つてるねー）、ヤーイチユナサン 畑ンセーヤー 豚ヤシナティヤー、ソーシガ シグマーカイ、フリーナイシグハーエーハーエー（あなたは畑を耕して、豚の世話もして忙しいのに、すぐあちこちに出かけて行つて）。ナーナ、ワンネー マーカイ イカンドー（私はどこも行かないよ）。

—好奇心があるのはいいことですよ（笑い）。

こうやつて清一さんたちの話を聞いていると、なんだかガージャンチュの気質までうかがえるような気がしますね。